

---

# 初恋失敗

佐倉 洲桃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

初恋失敗

### 【Zコード】

Z9960F

### 【作者名】

佐倉 洋桃

### 【あらすじ】

学生の時の初恋が実らなかつた主人公・菅田美菜子は、社会人になつても恋愛では失敗ばかり。しかし予期せぬ再会や出会いを通して、今までとは違う恋愛を経験する。

## 第一話

賑やかな教室の外、暖かな光りを浴びたベランダに少女は誘われる  
ようにたどり着く。

足もとに視線を向けると一人の少年が一冊の本を読んでいる。  
その本を見たとたん、少女の顔色は見る見る青ざめていく。  
本から視線を少女に移した少年は、口元だけ微笑んでいた。  
しばらく立ちすくんでいた少女は、弱々しく少年に話しかけた。

「何・・・読んでるの？」

少女の声は若干震えていた。

「それ。こっちのセリフ」

爽やかな笑顔で少年は少女に読んでいた本を渡し、立ち上がる。  
ゆっくりと近づいてくる少年に少女は渡された本を握りしめる」と  
しかできない。

スローモーションの様に少年は少女の横を通り過ぎる瞬間

「気持ち悪いんだよ！」

少年にしては低いその声に少女の瞳から涙が零れた。

「つ・・・」

目覚めた女性。かんだみな菅田美菜子はゆっくりとベットから体を起こした。

「はあ」

汗ばんだ体を落ち着かせようとするが、溜息で失敗に終わった。  
心音を確かめるように胸元を抑え、掛け時計に目をやる。

「悪夢のお陰で早起きだよ」

普段より早い時間を知らせる時計にまた溜息。

悪夢。

美菜子の初恋が実ることなく終わったあの日。

久しく思い出すことのなかつた過去の出来事に朝から憂鬱になつてしまつ。

「気持ち悪いよね」

囁きながら美菜子が見たのは、一人暮らしの彼女の部屋には似つかわしくない大きな本棚。

感傷に浸りかけている自分の心を叱咤しつつ、よひやべベッドから抜け出した。

「おはよう。蝶さん」

一人暮らしを始めてからの日課であるテレビ番組の司会者に挨拶をする。

蝶ネクタイがトレーデマークの司会者は、爽やかに番組進行をしている。

しばらく番組を見ていると、時間がかなり過ぎていた。

「やばい」

美菜子は、悪夢を記憶から追い出し急いで出勤支度にかかつた。

よつやく支度が終わり美菜子はテレビを見た。

番組は既に変わり、別の司会者たちがニュースを伝える。

いつもと変わらない時間に支度が終わつたことを理解し、美菜子は安堵する。

「行つてきます！」

司会者への挨拶が終わると、電源を切り「コードを羽織る。

玄関の鍵を掛けると、少し冷えた風が首筋を通り抜けた。

急いで駐車場の車に乗り込むと、冷えた風から遮断される。

日差し避けのサングラスを掛け、車にキーを差し込む。

低いエンジン音と共に流れてくる音楽。

最近気に入っている流行りの曲を口ずさみながら、美菜子はアクセルを踏んだ。

今日もいつもと変わらない道を通り、美菜子の一日が始まる。  
それは、今朝の悪夢を忘れてしまつほど変わらない一日の始まりだ  
った。

## 第一話

「おはようございます。」

社員用の大きな玄関。

その横にある警備室で鍵を受け取る。

県最大の企業が誇る高級感漂う人気ホテルには、さまざまなテナントが入っている。

中でもホテルが力を入れている婚礼課と切つても切れない場所。婚礼衣裳を扱う衣装室こそ、美菜子の勤務先である。すれ違うスタッフと挨拶を交わし、衣装室の扉を開いた。

「おはよう」

美菜子が掃除を始めると、スタッフが出勤してきた。  
この衣装室のチーフである山口紗奈恵だ。

「おはようございます」

二人で掃除を進めていくと、スタッフが一人出勤してきた。  
パートスタッフの坂下良子と、西田智子だ。

掃除も終わり、それぞれの業務をこなすため分かれていく。

「菅田さん、今月のイベント用のドレスどうします？」

西田に問われ、美菜子は衣装室内のドレスケースを眺める。

今月のブライダルイベントは、チャペルでの模擬挙式と模擬披露宴の一  
部構成だ。

モデルに選ばれているホテルスタッフとドレスを頭の中で合わせてい  
く。

「確かに、今週新作が入荷予定ですので」

先日山口から伝えられた入荷日を思い出した。

「チーフ、新作出してもいいですか？」

フロアから事務所にいる山口に大きな声で許可を求めた。

すると、少し不機嫌な山口が事務所からフロアに出てきた。

「菅田さん、フロアーで大声出さないで下さい」

朝の挨拶が嘘のように、低く他人行儀な言葉に美菜子はバツの悪い顔をした。

「気を付けます」

この衣装室に移動してから何度も行われるやり取りに、近くにいた西田は苦笑いだ。

「新作は出してもいいわよ」

いつも通りの柔らかい言葉づかいに美菜子は微笑む。

「はい！」

ちつとも反省が見えない大きな返事に山口は溜息。

美菜子はそんな山口の様子に気づく様子もなく上機嫌だ。

「さつそくモデルさんに伝えないと」

嬉々として内線を掛けようとする美菜子を制止する声がかかる。

「それは入荷してからよ…」

「それは入荷してからの方が…」

西田と山口の見事なハモリに三人目を合わせ笑い出す。

「細かい日には指定しないんだからね。」

山口の言葉で自分がついさつき、今週入荷と言っていたことを思い出した。

美菜子は顔を赤くしてカラ笑いしてしまう。

「そうでした。」

顔を描きながら小さな声の美菜子に、西田と山口は笑ってしまう。和やかなまま業務は進んでいった。

「それで朝は賑やかだったんだ。」

今朝の一件を聞いた坂下が微笑ながらお茶を口にした。

昼食は交代で社員食堂に行くため、三時で帰る西田以外のスタッフの息抜きは午後の休憩だ。

その事務所での休憩で朝の話になり、美菜子は居心地悪そうに視線を泳がせ別の話題を探す。

「そ・・そういうえば、婚礼課には誰か来るんですか？」

ちょうど一年前は美菜子がこの衣装室に移動してきたこの季節を思い出した。

「知りたい？」

このホテルのスタートと共にテナントである衣装室勤務をしている山口は大概の事情を知っている。

その山口が意味ありげに続ける。

「今月で退職が決まってる人がいるからね、別の式場で婚礼課にいるみたいよ」

退職と聞いて、妊娠をきっかけに退職する婚礼課のおつとりとしたスタッフを思い出した。

「元気な赤ちゃん生まれるといいですね」

微笑む美菜子に坂下が楽しそうに話す。

「菅田さんもいい人見つけなきや」

まったく浮いた話も出てきたためしのない美菜子は苦笑いしかない。

「そうそう、移動してくるのは男の子だよ」

山口はからかうように言う。

学生時代も、社会人になってからも恋愛失敗談ばかりの美菜子は、良くも悪くもこの手の話題で必ずいじられる。

「別に性別を聞きたいわけでは・・・」

この前も美菜子の恋愛失敗談で盛り上がったことを思い出し、つい

声が小さくなつた。

「相沢優人」

聞き覚えのある名前にドキリとする。

久しく聞いていないその名前は、美菜子の初恋の人と同じ名前だった。

「どんな子なんだろうね」

「さあ、会ったことはないのよ」

俯いてしまった美菜子を置いて、一人は盛り上がる。

「話によると、イケメンらしいのよ」

山口はホテルスタッフとの会話を思い出しながら話を広げる。

「しっかりしていて仕事できるみたい」

山口はここまで話、まったく無反応の美菜子に気が付いた。

「どうしたの？菅田さん」

「いえ、なんでもないですよ。」

考え込み、落ち込んでいた気持ちを振り切るように微笑む。

「彼女いるか気になるね」

坂下は美菜子に微笑みかけながら言った。

「結婚はしないみたいよ」

山口にまでそんな言葉をかけられ、また美菜子は苦笑いするしかなかつた。

「あら。もうこんな時間」

坂下の声で休憩時間は終わりを告げた。

「お疲れ様でした」

一日の仕事が終わり、美菜子は朝と同じ警備室に鍵を返却した。

社員駐車場で山口と別れると自分の車に乗り込む。

春に近いこの季節は車内温度が低い。

ひんやりとしたハンドルを握り、美菜子は家路へと急いだ。

## 第三話

「お疲れ様でした。お先に失礼します。」

一日の業務が終わり、美菜子はホテルの総務課に日計報告書を提出していた。

ホテルの事務所にはまだ多くのスタッフが残っているため出入り口での挨拶は声が大きくなる。

「菅田さん、ちょうど良かつた」

ドアに手をかけた美菜子に声をかけてきたのは、婚礼課支配人の越智宗一朗だ。

美菜子はドアから手を放し、手招きしている越智の元へ行つた。

「相沢」

越智が声をかけると、デスクで荷物整理をしていた人物がやつてきた。

「紹介するね、婚礼課に移動してきた相沢です。こちら衣装室の菅田さん。」

「今日からホテルの婚礼課勤務になりました、相沢です。」

越智に続き固い挨拶をしている相沢に、美菜子は動搖しつつ挨拶をする。

「衣装室に勤務しています、菅田です。」

二人がお互いに頭を下げ挨拶していると、越智が苦笑いした。

「固いなあ、山口さんから同じ学校だって聞いてたのに」

確かにその通りだった。

今、本人に会うまで美菜子は同姓同名の別人と自分に言い聞かせてきた。

それが、美菜子の恋愛失敗談第一号の初恋の相手が目の前にいる相沢だった。

「一応勤務中ですから」

越智支配人に困ったように笑いながら話す相沢に、美菜子は懐かし

さを覚えた。

数年前の地元での成人式では話すどころか、目も合わせられなかつた。

その相沢が話している声を聞くのは久しぶりだ。  
だから忘れていた

「別に俺、彼女と親しかったわけではないので  
自分は相沢に嫌われてしまつた事を。

爽やかな笑みのまま吐き出された言葉に、美菜子は俯いてしまう。  
「あ、そうなんだ。」

確認するように越智支配人が自分を見ていることに気が付き、慌てて繕つた笑顔でこたえる。

「そうなんですよ。」

越智支配人を見ることはできても、相沢がどんな顔をしているのか怖くて見れなかつた。

嫌な感じにはなつてしまつが、時計を横目で確認した。  
「ごめんね足止めしちゃつて。お疲れ様。」

「いえ、お疲れ様でした。」

美菜子は相沢を見ないように俯き足早に事務所を後にした。

「ロッカールームがないのは不便よね」

いつもより多い荷物に山口はため息交じりに愚痴つた。

「そうですよね。せめて着替えて仕事したい。

山口に賛同したのは美菜子の後輩にあたる二宮葵にのみやあいだ。

二人が言つのように、衣装室にはロッカーもなくいつも荷物は事務所に置いていた。

「確かに。」

美菜子もいつも置いている場所ではなく足もとから荷物を取り出しながら賛同した。

「さつさと着替えていどうしないと」

そういうと、一宮は着替えの入ったバックと共にフロアーにあるフィットティング室に入った。

「急いだって時間通には始まらないわよ。」

一宮にこえを掛け、山口も別のフィットティング室へ入つて行つた。美菜子も重い足取りでフィットティング室に入る。

いつもはスーツで帰るが、今日は着替えなければならない。

今日は婚礼課の歓迎会に各テナントも出席するため、スーツでは出席できない。

集まりに参加すること自体は好きだったが、今日のメインである相沢を思うと気が重くなってしまつ。

「せんぱーい、まだですか？」

だらだらと着替えていると外から一宮にせかされてしまつ。仕方なく、美菜子は素早く着替えフィットティング室のカーテンを開けた。

二次会はいつものカラオケだった。

二次会と言つても参加者が多いため順番はなかなか回つては来ない。  
「少し外の空気吸つてきます」

近くにいたスタッフに声を掛け、美菜子は席を立つ。

「そんなに飲んでたつけ？」

かけられた言葉に曖昧に頷きながら扉を閉めた。

外はやはり肌寒く、美菜子はすぐに店内へ引き返そうと扉に手をかけた。

「あつ」

意図せぬタイミングで扉が開き、美菜子は前のめりに躊躇してしまつ。床とは違う柔らかい感触に、誰かに受け止められたんだと気が付き慌てて離れるように立ち上がつた。

「つ・・・・・」

相手を見上げて、美菜子は言葉を止くした。

それもそのはず。

相手は見知らぬ人ではなく

「相変わらず鈍くさいんだな」

「あ・・相沢さん」

相沢優人だった。

あまり関らないように・視界に入れないように・支配人のネタにされないように。

氣を使つただけに美菜子は驚きを隠せなかつた。

そんな様子に溜息を吐き、相沢は手に持つていたスプリングコートを美菜子の肩にかけた。

「コンビニ近いんだろ?」

「うん」

誘うように扉を開けられて、断ることなく外に出た。

ツカツカと先を歩く相沢の少し後ろを美菜子は歩いていた。

先度は親しげに話してきた相沢だったが、結局コンビニについた今も会話はなかつた。

先に中に入った相沢を追うべきか迷いつつ、ガラス越しに映る姿を見ていると

幻覚でも見ているような気分になつてくれる。

「優人」

学生時代の呼び方で声をかけても相沢と目が合つことはなかつた。今、一人ではない事を確認したくて肩に掛けられているコートに顔を埋めた。

「何やつてんだ？」

自分より若干上から声をかけられ、美菜子はゆっくりと顔をあげた。目の前にいる優人はスーツを着こなしている社会人で、たつた今顔を埋めていたコートからは甘めのフレグランスが香っていた。先ほど自分が呼んだ学生の相沢優人は目の前の人物と一緒になんだろうか。

そんなことを考えている自分に苦笑いしてしまう。

「ちょっと、寒くて」

「だつたら外で待つてんなよ」

先ほどとは違う唸るような低い声に美菜子は身をすくませる。

「この煙草、自販じや置いてないんだ」

「そつか」

今度は穏やかな声に安心して体の緊張をといた。

あの声は幻覚の続きだったのかも

そう思うと相沢が少し先で自分を待っている姿が目に入り、慌てて駆け寄つた。

「付き合わせて悪かつたな」

出てきた店に着くころ声をかけられ、つい立ち止まつてしまつ。

「寒かつたんだろ」

少し照れたように話す相沢の顔は幼くて

また、楽しかつた学生時代を思い出してしまつ。

穏やかで楽しかつた時間

あの頃と同じ関係に戻れる気がして美菜子は相沢の隣に立つた。

「あのね優人」

「勘違いすんな！」

美菜子が声をかけたとたん、相沢は厳しく叱るよつこ声を出した。

「移動して早々、テナントの人間と上手くいかなこと感じ悪いだろ」「低く美菜子を突き放すような声で相沢は続ける

「俺とお前は、ただのクラスメートだった」

目を合わせてしまつた顔を動かせない。

「頼むから迷惑かけないでくれよ」

まるで学生の時と同じだった。

軽蔑するよつな、刺すよつな視線に耐えかねて美菜子は俯いてしまつ。

ここを笑顔で乗り切る気力はなかつた。

「じめん。」「一トありがとう」

差し出されたコートを乱暴に受け取ると、相沢は店に向かつて歩き出した。

「わ・・私も買うものあつたんだつた」

とても一緒にあの店に帰る気はしなくて、とつそに嘘を吐く。

足音は遠ざかるだけだ。

真つ青な顔を恐る恐る上げると、もう相沢の姿はなかつた。

「先に戻つて」

息を吐くように、小さく出た声にも返事はなかつた。

美菜子はあの時と同じよつに

「気持ち悪いんだよ！」

自分に向けられる声と態度に震え、立ち去くしかできなかつ

た。

## 第五話

太陽の眩しさから逃げるよつて美菜子はベッドに潜った。

昨夜の相沢が頭から離れず、休日の朝から美菜子はベッドから出でない。

予定もない今日は何もやる気は起きない。

「誰だろ」

流行りの曲が流れる携帯電話を手に取ると、相手は後輩の一畠だつた。

「はい」

いつまでも鳴りやまない携帯に仕方なく出る。  
寝起きの掠れた声に自分でも呆れてしまう。

「先輩。今お家ですかあ？」

いつも通りの元気な声にげんなりする。

「そうだけど」

「よかつた。今日神坂さんと変わつてもらつたんですね」「  
美菜子の不機嫌さを隠さない返事を気にせず一畠は続ける

「今から迎えに行きますね」

楽しそうに自分の行動予定を話す一畠に驚いて固まつてしまつ。

「用意して待つてくださいね」

「ちよつ」

急な展開についていけず、携帯に慌てて出した声が言葉になる前に  
通話が切れてしまつ。

かけ直しても出る様子のない一畠を恨めしく思いつつベットから出る。

一人で考えているより、誰かと一緒にいる方が気が晴れるかもしね。  
ない。

そう思つと、美菜子は急いで身支度を始めた。

「シートベルト締めてくださいね。」

一宮の車に乗り込むと、ココナッツの香りが鼻をついた。

「はいはい」

返事をしながらシートベルトを締める。

自分の車とは違い、若者らしい車内に頬が緩んでいく。

「少し遅いですけど、まずランチ行きますね」

そう言つて田舎地に向けて車を走らせる一宮が自分にきを使つていることに気が付く。

「シフトいいの？」

窺うように尋ねると

「神坂さんって良い人ですよね」

携帯でも聞いた名前に、美菜子は同じ職場で働くスタッフが顔に浮かんだ。

きっと一宮は素直に自分を励ますためとか言つたのだひつ。

そう思つと溜息が出てしまひ。

「空腹ですか？」

見当違ひなことを言つて居る後輩にまた溜息。

「もう着きますよ。」

明るい一宮の声に笑つてしまひ。

本人は分かつていない気がするが、いつもこの後輩の明るさには助けられている。

「ありがとう」

美菜子の言葉に満足そうに微笑んだ一宮は、車を上機嫌に走らせた。

「一富の車は、ランチの後の買い物で荷物だらけになつていて。美菜子は普段セールでもこんなに買い物込んだためしがないため、何度も後ろの荷物を確認するように見てしまつ。

「ストレスは買い物で発散しないと！」

「一富の自信めいた言葉に思わず頷いてしまつ。

「でも、なんか典型的って感じ」

「基本ですね。基本」

そんな会話を今日はずっととしていた気がする。

会話を思い出しても、見慣れたマンショングが見えてきた。

「先輩」

「なに？」

運転中の一富の横顔は、少し緊張していた。

「昨日はあんな所に居たから心配しましたよ」

「じめん」

昨日、相沢と別れた道端で動けないでいた美菜子を探したのも、家まで送つたのも一富だった。

あまりの顔色の悪さに昨夜は一言も一富は話しかけてこなかつた。  
「気を付けてくださいよ。女の子なんですから。」

「うん」

それでも何があつたかは聞いてこない

「夜は危険ですから」

「うん」

からかうような声にホッとした。

いくら気分が良くなつてきても、昨夜の事を話す気にはなれなかつた。

車内の空気が明るくなつてきた所で、タイミングよくマンションに着いた。

「運びます?」

「大丈夫だよ

荷物を両手いっぱいに持つてドアを閉める。

「お疲れ様です」

開けた窓から一宮は美菜子に声をかけた。

「今日は本当にありがとう」

そう言って荷物を持ちなおす美菜子に一宮は手を振る。

「部屋まで頑張ってください」

「任せておいて！」

ゆっくりと走り出した車を笑顔で見届けて、美菜子はマンションに帰つて行つた。

## 第六話

「おめでとうござります」  
「ありがとうございます」

披露宴を終えた新郎新婦はとびっきりの笑顔で返事をしてくれた。美菜子が会釈をし通り過ぎようとするとき、小さくかわいらしい花嫁に袖を掴まれた。

「あの・・一緒に」

それだけ言つと顔を赤く染め俯く花嫁に美菜子が困ったように微笑むと

「一緒に写真撮つてくれませんか？」

細身のタキシードに身を包んだ花婿が花嫁の言葉の続きを紡いだ。

「喜んで」

美菜子の返事に一人は顔を見合せ、さらに笑顔になつた。

しあわせだなあ

いつも婚礼を終えた一人の笑顔を見るとそう素直に思えた。

「では、そちらに並んでください」

カメラマンの指示通りに並んだ二人

美菜子は花嫁の隣に並ぼうとするが、また袖を掴まれてしまつ。

「ココへどうぞ」

花婿の記す「ココに苦笑いしてしまつ。

「いえ、私は端で」

「そう言わずに」

言葉を被せる様に言われ美菜子は一人の間に立つた。

自然に美菜子の腕を抱く花嫁は映画で見たどの女優よりもかわいらしく輝いている。

「はい、こちらに笑顔ください」

カメラマンの明るい声に二人は笑顔でカメラを見た。

「私も事務所に行くわ」

「神坂さん？」

事務所へ向かう美菜子に声を掛けたのは、先輩スタッフの神坂浩美みさかひろみだ。

「発注書よ」

神坂は用紙を見せ悪戯つ子のように笑った。

「よかつた」

その言葉に美菜子は小さく呟いた。

あの歓迎会から婚礼課がある事務所に行くのは億劫だったのだ。

「お疲れ様です」

事務所に入ると相沢が越智支配人と話している姿が目に入り、美菜子は小走りで総務課へむかつた。

総務課のスタッフに書類を投げるように渡して事務所を出ようと

「お疲れ様」

振り返らなくてもその声は相沢のものだとわかつてしまつた。

「お先に失礼します」

早々に立ち去ると、挨拶だけ返し扉から出ると相沢もついてきた。不思議に思い振り返ると腕を掴まれ休憩スペースに連れ込まれてしまつた。

「相沢さん？」

恐る恐る名前を呼ぶと美菜子の目の前に暖かいアップルティが差し出された。

「好きだったよな？」

しつかりとアップルティを握り美菜子が頷くと、相沢は缶コーヒー

を口にした。

美菜子が緊張の余り立ち尽くしているので相沢は苦笑いした。

「IJの間は悪かった」

「・・・え？」

少し小さい相沢の声にワントンポ遅れて反応してしまつ。

「歓迎会」

その一言で最悪の会話を思い出し、美菜子は俯いた。

「今日楽しそうだつたな」

急に話題を変えられて、美菜子はついでいけずに相沢を見上げた。

「今日の新郎新婦嬉しそうだつた」

「そうだね。幸せになつてほしいなあ」

自分が担当し、写真を撮つた二人を言つているのだと思つと美菜子は笑みが浮かんだ。

言葉にしたとおり、幸せになつてほしい。

「その顔」

「え？」

相沢に指をさされキヨトンとした美菜子に相沢は笑つた。

「新郎新婦より幸せそうな顔してたぞ」

「つそつ！」

指摘された表情よりも写真を撮つていたところを見られていた事に驚いた。

「IJの仕事好きなんだな」

少し考えた後、美菜子は大きく頷いた。

「お互い大人になつたんだよな」

相沢はどこか遠くを見て呟いた。

「悪かつた」

今度はハツキリと美菜子を見て謝る相沢に驚いてしまつ。

先日の相沢は別人だつたようだ。

「気にしてないで、酔つてたんだよきっと」

頭を下げる相沢に落ち着けなくて声を荒げてしまう。

そんな美菜子の様子に、また相沢は笑った。

なんだか久しぶりに優人の笑つた顔を見た気がする。美菜子もつられて笑いだした。

二人の目が合い、美菜子の笑顔を見ると相沢は突然歩き出した。「俺仕事残ってるから」

そう言って休憩室を出ていく相沢の顔は心なしか赤くなっていた。一人残された美菜子は、ようやく握りしめていたアップルティに気がついた。

冷たくなったアップルティを鞄に入れると、美菜子も休憩室を後にした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9960f/>

---

初恋失敗

2010年10月10日05時02分発行